

SHOW HEY シネマルーム

ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ オリジナルバージョン、デジタル・リマスター版	
1976年・フランス映画 配給/メダリオンメディア 85分	
2010(平成22)年7月21日鑑賞	テアトル梅田

Data

監督:セルジュ・ゲンズブール
出演:ジェーン・バーキン/ジョー・ダレッサンドロ/ユーグ・ケステル/ジェラルド・バルデュー

👁️👁️ みどころ

近時ハリウッドでも韓国でも同性愛(ゲイ)の名作が増えているが、フランスでは1976年既にその「名作」が!もっとも当時は、悪評9対好評1だったらしいが、それは時代がゲンズブール監督の才能についていけなかっただけ?注目は、後に「エルメスのバーキン」として有名になった、両性具有と見まちがうような女優ジェーン・バーキン。

異常性愛だって愛は愛。そうは思いつつ、本作にみる若者たちを瑞々しいと共鳴できるか、それとも不潔と感じるかは、あなたの感性次第?

* * * * *

70年代のフランスの問題作が今!こりゃ必見!

ネット情報によれば、セルジュ・ゲンズブール監督はフランスを代表するミュージシャン。そして1976年公開の本作は、彼の初監督作品にして、スカンダラスな問題作とのことだ。また、ゲンズブール監督が当時不倫関係にあったフランス人女優ブリジット・バルドーのために書いた曲『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』は、バルドーのあえぎ声の演技が露骨すぎるとしてリリースされなかったらしい。他方、後に「エルメスのバーキン」として有名になったのが、本作に登場し、自ら「胸とお尻がない」と宣言していた、男の子のような女の子ジェーン・バーキン。

ところで、本作はなぜ問題作に?それは、1976年という時代にクラスキー(ジョー・ダレッサンドロ)とパドヴァン(ユーグ・ケステル)の同性愛(ゲイ)を描き、その中に両性具有的な女の子ジョニー(ジェーン・バーキン)を絡めることによって、瑞々しくも何ともややこしい(?)三角関係を過激な性描写を交えて描いたため。そのため本作は1

976年にパリでは公開されたものの、イギリスをはじめ海外では発禁となり、日本でも1983年と1995年に劇場公開されたが修正が加えられたらしい。そのオリジナルバージョンが今、デジタル・リマスター版として公開。こりゃ必見！

「世論」も大事だが、信念はもっと大切では？

「小嶋退場」直後に登場した菅直人政権は当初こそ高支持率を誇ったが、消費税発言によって急速にそれを失い、7月11日の参議院選挙で民主党は大敗。そんな「世論」を受けて、今や菅直人首相は小沢一郎前幹事長に会見を求めたり、野党やマスコミに対してやけに低姿勢になったりと大変身。たしかに、民主主義的政治を行うについては「民意」が大事だが、財政再建のためには消費税増税が不可欠と判断したのなら、それを押し通す信念はもっと大切では？

そう考えると、まさかゲンズブール監督自身が同性愛（ゲイ）ではないだろうが、1976年という時代に男女同性を備えたような中性的な女優ジェーン・パーキンを起用し、男女の正常なセックスができないクラスキーに対して、「私、男だから」とお尻を突き出す演技をさせるのは、あまりにも急進的？映画界には常に前衛的な作品が登場するから、今本作を観てもR-18は当然だろうと思う程度だが、1976年当時はかなりスキャンダラスで話題騒然となったのもうなずける。その結果、1976年公開当時は「悪評9対好評1」だったらしいから、やはり「世論」がゲンズブール監督の感覚についていけてなかったわけだ。ところが、1995年に日本でフランス語バージョンが公開されると、本作は多くのファンに称賛され大ヒット。そして今回、新宿武蔵野館の90周年記念作品として本作が日本で上映されたのは、やっと世論がゲンズブール監督の信念に追いついたため・・・？

揺れ動く恋心と高まる嫉妬心がポイント！

映画冒頭、大きなトラックに乗って廃品処理の仕事に従事しているクラスキーとパドヴァンの姿が映し出される。それを観ているだけで2人の妖しげな関係と、リーダーシップをクラスキーが取っていることがありありと見てとれる。2人はゲイの関係を最大限大切にしながら、街から街を回って人が嫌がる廃品処理の仕事をしているらしい。そんな2人の「臭い」は回りの男たちにすぐわかるらしいが、本人たちは至って無頓着で、自分たちの愛に満ちた生活を楽しんでいる。そんな関係にヒビが入ったのは、小さなバーで出会った胸ペチャの女の子ジョニーとクラスキーが互いに興味を抱き、それが次第に恋心になっていったため。

映画を観ていると、クラスキーは女性との正常なセックスができない根っからのゲイ(?)のよう。したがって、いくらジョニーが男の子のようだとはいえ、なぜ女の子に好意を持ったのかは私にはわからない。もっとも、私以上にそれがわからず、嫉妬心に狂っ

たのが相棒のパドヴァンだ。『ロミオとジュリエット』(68年)もそれを現代版にした『ウエスト・サイド物語』(61年)も純真な若者なればこそその純愛が悲劇的結末を招いたが、クラスキーとジョニーとの間で揺れ動く恋心と、2人の出会いによって1人外に取り残されてしまったパドヴァンの嫉妬心はその後いかなる展開を？それを瑞々しい感性と捉えるか、それともイヤらしい奴らだと見るかが、本作鑑賞のポイントだ。さあ、あなたの見方は？

「白馬の若者」をどう理解？

本作の第1の見どころは、一目見た時からショートカットとペチャパイが印象に残る女の子ジョニーが後半見せる大胆な演技。男はあまりヌード姿を披露しても絵にならないが、女はいくらペチャパイでも十分絵になるし、ジェーン・パーキンは時折ハッと思わせる美しさを見せるから、それに注目！とりわけ、後半くり返し見せてくれる、異常性愛(?)の中での痛みに耐えるジョニーのあえぎ声(叫び声)は・・・？

他方、本作第2の見どころ(聞きどころ)は、アップテンポで単調ながら軽妙で楽しい音楽。トラックが運転される時、若者たちの解放されたセックスが展開される時、再三にわたってこの音楽が流れるから、それに注目！

しかして、第3の見どころは、出演シーンは少ないものの白馬にまたがって現れる若者(ジェラルド・ドナルド)は、ジョニーに夢中になっているクラスキーが自分をかまってくれないためふてくされているパドヴァンに対してかなり辛辣な言葉を投げつけるのだが、このシーンには一体どんな意味が？そして、これをどう理解すればいいの？そこからあたりのゲンズブール監督の狙いも、じっくり考えてみたい。

泥沼の三角関係とその結末は？

三角関係を描いた映画は数多いが、私が一番強く印象に残っているのは、陳凱歌(チェン・カイコー)監督の名作『さらば、わが愛/霸王別姫』(93年)。京劇のスターになることを目指して幼い時から苦勞を共にしてきた男役の段小楼(張豊毅/チャン・フォンイー)と女役の蝶衣(張國榮/レスリー・チャン)は固い絆で結ばれていたが、段小楼の前に美しい女性・菊仙(鞏俐/コン・リー)が登場して恋に落ち、結婚にまで至ったため、2人の関係には大きな変化が。さらに、時代は日本軍が攻め込んでくる中国最大の激戦期。さらに、日本を敗退させた後も文化大革命の嵐が吹き荒れる中、2人の運命は？

『さらば、わが愛/霸王別姫』は、段小楼、蝶衣、菊仙の三角関係をそんな大河ドラマとして描いた大傑作だったが、本作は同じ三角関係でも瑞々しい青春時代の1頁、ひとコマを切り取っただけのもの。本作後半のハイライトは、嫉妬に狂ったパドヴァンによるジョニーに対するある報復だが、いたずらみたいな形で命に影響を与えるかもしれないような嫌がらせを受けたのでは、ジョニーもたまったものではない。そこに登場したのがクラ

スキー。リーダーシップはもちろん、体格的にもクラスキーはパドヴァンを圧倒していたから、パドヴァンはクラスキーの姿を見ただけで後ずさりする状態。したがって、ジョニーはここぞとばかりに、自分を殺すかもしれないパドヴァンを「痛めつけて！」とクラスキーに頼んだが、さてクラスキーの行動は？

三角関係の清算における修羅場では、往々にして「あなた（お前）はどちらを選ぶの？」という問いかけになりがち。そして、言い方こそ違え、それは本作でも同じだ。さあ、泥沼の三角関係最後の修羅場における結末は？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2010（平成22）年7月22日記

民主主義 v s 一党独裁、どちらがいい？

1) 1945年8月15日の敗戦以降、日本は民主主義の国になった。それに対して、中国大陸から大日本帝国の軍隊を追い出した後の国共内戦を経て、1949年10月1日に成立した中華人民共和国は、中国共産党一党独裁の国。私たち日本人は当然民主主義の方が一党独裁よりいいと考えているが、さて・・・？北朝鮮も同じように朝鮮労働党一党独裁の国だが、ここは一党独裁と個人崇拜がセットになっているから最悪。しかし、みんなの合議でトップを選び、1度選ぶと10年間はその指導に従うというやり方は、うまく運用できれば必ずしも悪いものではないのかも？

2) 毛沢東 鄧小平 江沢民 胡錦濤に続く第5世代のリーダーとして、2012年からは習近平がトップに立つことが事実上決まったが、現時点での彼の評価は「辛抱づよく人の話を聞き、敵を作らない」人らしい。胡錦濤体制の下で今後2年間の予行演習を経た後、2012年からは今やアメリカと並ぶ超大国となった中国を引っ張っていくのだから、その人物像に注目したい。

3) それにしても、日本はかつての吉田茂内閣、中曽根康弘内閣、近時の小泉純一郎内閣は5～7年の長期政権を敷いたが、小泉以降の安倍晋三、福田康夫、麻生太郎、そして政権交代以降の鳩山由紀夫、菅直人たちの政権と総理大臣の地位はあまりに軽い。毎年のようにリーダーがころころ変わったのでは安定的な政策の実施などできるはずがない。外交においても各国から軽んじられバカにされるだけだ。また総理大臣をボロクソに言えるのも民主主義国家ならではの快感(?)だが、一国の総理がアホバカバラエティーのネタにされ、お笑いやおちょくりの対象にされるようでは日本の民主主義もおしまい？そう考えると、民主主義 v s 一党独裁、どちらがいい？

4) ひょっとして、そんなことを真面目に考えなければならぬのかも。そしてまた、日本を劇的に立ち直らせるためには、産経新聞の論調のような大胆かつ刺激的な処方箋が必要なのかも？

2010（平成22）年10月30日記